
夢の終わり

飛燕

注意事項

このPDFファイルは小説サイト「小説家になろう」で掲載中の小説を、「PDF小説ネット」の変換システムが自動的にPDF化したものです。この小説の著作権は作者にあり、作者または「小説家になろう」および「PDF小説ネット」を運営するウメ研究所に無断でこのPDFファイルおよび小説を引用を超える範囲で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止します。小説の紹介や個人用途での印刷および個人用途での保存はご自由にどうぞ。

【小説名】

夢の終わり

【コード】

N3748A

【作者名】

飛燕

【あらすじ】

少年が見る二つの夢。そのどちらか一方は現実起こる未来の出来事。生命に関わる二択を迫られた少年は

プロローグ：突然の別離（前書き）

非現実的要素を含んでいるため、ジャンルはSFになっていますが、基本は恋愛です。

あまり、SFさは期待しないで読んでください。

プロローグ：突然の別離

「別れよう」

夕暮れに染まる蒸し暑い教室の中にボクはいた。向かい側には見慣れた少女の姿。整えられた机と椅子、磨かれた黒板、綺麗に拭かれた床。

数時間前まで生徒で賑わっていた教室とは別世界の様な、静かな空間にボクの声が響いた。

「え？」

「ボクと別れてほしい」

「な、何言ってるの？」

ボクの言葉に困惑している少女だったが、数秒後には一転して笑顔に変わる。いつもの屈託のない笑顔。

それを今から壊そうとしているボクがいる。

「あ、分かった。またいつもの冗談でしょ？ もう、今日は騙されないからね？」

それにその冗談ちよつと酷いよ？」

目の前の少女の頬が膨れる。整った顔立ちで普段は実年齢より上に見えるが、今はその仕草のせいでいくつか幼くみえる。

「冗談じゃないよ。他に好きな人が出来たんだ」

「ねえ、しつこいよ？ そんなことより早く」

「真面目に聞け！」

「っ!？」

ビクツと少女の身体が跳ねる。二人の言葉が途切れ、再び静寂に包まれる放課後の教室。窓の外からはポツポツと雨音らしき音が聞こえてくる。

今はこれが唯一の音だ。

「ごめん。でも別れて欲しいのは本当なんだ」

「……どうして？」

何とか笑顔で話そうとする少女。しかし、それは失敗に終わり、少し引きつった泣き顔になっていた。

昨日までとは全く対照的な表情に、胸がズキズキと痛む。

「昨日何かあったの？ それとも私が嫌われるような事しちゃったから？」

「うつん、そんな事はないよ。真帆はボクには勿体無いくらい、いい子だと思う。」

ただ、ボクがいい加減なヤツだっていうのは、よく知ってるよね？」

「嘘……北斗はそんな人じゃない。それに私は北斗じゃなきゃ」

「……」

「嘘だよな？」

すぐる様な視線に耐え切れず目を伏せる。そして唇を噛み締め、何とか言葉を発する。

「ごめん」

既に少女の両目からは涙が溢れ出ていた。昨日までのボクならその涙を拭ってやる事が出来た。

しかし、今となっては出来るはずもなく、滝のように流れる涙をただ見つめることしか出来ない。

「ほく……と」

窓の外に目をやると、何時の間にか土砂降りになっていた。厚い雲に覆われた空に、さっきまでのオレンジ色の光はない。

「じゃあ、ボク帰るよ」

「北斗……」

ボクの名前を呼び泣き崩れる少女を背中に感じ、逃げるように薄暗い教室を出る。

雨は一層激しくなり、耳障りなノイズが響いていた。

まだ梅雨は明けそうになかった

ブログ：突然の別離（後書き）

まずここまで読んでいただいて、ありがとうございます。

この話は最後の一步手前まで出来ていますが、最後の編集に手間取っています。

ゆっくりとした更新ペースですが、これからよろしくお願いします。

第一話：平穏な日常

「と。く」と

「……」

深い闇に支配されている視界。ふわふわと心地いい　ここはどこだろう？ さっきから揺れてるのは地震？

……いや、それよりもっと人工的な何か

「北斗――！」

「っ！？」

次の瞬間、突然の大声で一気に世界が変わる。色づいた世界の眩しさにたじろぎ、見上げたそこには真帆の顔があった。

「おはよ」

「ん、おはよう真帆」

そう言いながら、改めて真帆の顔を見る。小さく整った鼻、潤った薄い唇、透き通るような白い肌。そして何より印象に残るのは、大きな目の中にある澄んだ漆黒の瞳。

初対面の人ならまずその瞳に見入ってしまうだろう。昔から見慣れているボクでさえ、対話時は知らず知らずのうちにその瞳に惹かれていく。それらを総じて学年でも『美少女』として結構知名度は高いらしい。

我ながら何故こんな子が自分の彼女であるのかが謎だ。

「どうしたの？ 人の顔ジーツと見たりして？」

「ん、何でもない。真帆の方こそどうしたの？ 何かあった？」

「何かあったって……。北斗、もう昼休みだよ？」

「え？ ウソ？」

「ホント」

辺りを見回すといつも光景　見慣れた教室　が広がっていた。

クラスメイトは各々の昼食を取り、中には机をいくつも繋げてグ

ループで食べている者もいる。

時計に目をやると確かに正午を過ぎている。

そういえば小腹が空いてるな……。

「それにしても北斗ってホントによく眠るね？」

「ん、昇校の眠り姫と呼ばれてるから」

「眠り姫？　じゃあ今度から口付けで起こしたほうがいいかな？」

「出来るの？」

そう言っただけで真帆の瞳を見つめると、真帆も視線を返してくる。

しかし、それは長くは続かず次第に真帆の視線が泳ぎだし、顔も

面白いくらいに紅潮していく。

そして搾り出すように一言。

「……出来ません」

限界まで真っ赤になった頬を両手で覆う。

普段は凜とした雰囲気さえ醸し出しているが、この手の話になるとこうなってしまう。

いつも何を想像してるんだろう？

「照れるなら最初から言わないでよ」

「うん……」

「たきせと ほくと 瀧本北斗十七歳、昇華高校二年生、帰宅部、趣味昼寝」

「ん？」

「みずの まほ 水野真帆十六歳、同じく昇華高校二年、吹奏楽部所属、趣味映画鑑賞」

背後から聞こえてくる、色々な意味を込めた説明のような口調。

こんな変な登場をするヤツは、ボクの知る限り一人しか居ない。

「片やお茶目な居眠り魔、片や容姿端麗、頭脳明晰、優しく思いやりがあり、性格も完璧な才女。」

何でこんな二人がね〜？

「何か？」

「何か？　じゃないだろ。昼間から何やってんだ、このバカップル

は」

「別に何も……」

いつも突然背後から現われるこの男は、芥川大地^{あくたがわ だいち}。

大地は運動部に所属しているわけでもないのに、何故かアスリートのような身体つきをしている。

背丈も高く、男らしい　かと思いきや、かなり童顔だったりする。

本人はそれをかなり気にしている様だったが、身体も顔も敵つかったりしたら、恐らくボクとは縁がなかったと思う。

そんな大地とは中学校からの友人で今や親友と呼べる関係にまで発展していた。

ちよつと口調は悪いが、何だかんだ言っただけでボクと真帆の事を応援(?)してくれている

「お前ら二人はこれからの季節、教室をサウナに変える。頼むから余所で行ってくれ」

ハズだ。

「大丈夫、すぐに連れていくから」

いつもの様に大地の茶化しに対処する真帆。

以前は本気で「ひどい……」とか泣きそうになっていたのに。真帆も強くなったものだ。

「ほら北斗。ブーツとしてないで早く屋上に行こう?」

「ん、手を貸して」

「もうしょうがないな。よいしょっ　っあ!??」

「!??」

要望通り手を貸してくれた真帆だったが、細身の彼女に男の体重は支え切れず、真正面にいたボクに覆いかぶさる形になる。

そして、ほのかに朱に染まった端整な顔が息の掛かる位置に……。

「ご、ごめんね」

「い、いや、いいよ」

「かあ〜!!!　去り際まで見せ付けてくれるぜ!　暑い暑い。おい、誰か冷房いれてくれ」

とりあえず騒ぐ大地とクスクスと笑うクラスの十数名は放置して、屋上に向かうことにした。

真帆は当然だが、今回はボクも恥ずかしい。すっかり茹で上がった温かい真帆の手を引く。

そんな状況でもボクと真帆の口元は自然と緩んでいた。

第二話：不思議な力

青く澄んだ空とプカプカと浮かぶ入道雲、吹き抜ける風　　は文句のつけようがない。

しかし、春の暖かい日差しとは言い難い、六月特有の暑さと湿気の屋上。

春や秋ならグループで昼食をとる生徒もいるが、今の時期は幸か不幸かボク達以外に人の姿はなかった。

「はい、北斗。あ〜んして」

「……」

去年の秋、ボクが金欠で死にそうになった頃からこの昼食はずっと続いている。

真帆は料理が上手いから手作り弁当はありがたいけど、さすがにこれは周りの視線を関係なしに恥ずかしい。

当の真帆は嬉しそうにオカズを掴んだ箸をボクの口元に運んでくるけど……何が楽しいんだろう？

自分で食べた方が明らかに早いし時間もかからない。それに昼休みも食事だけで潰れるなんて事はないはずだ。

そんな事を考えてるボクに「どうしたの？」と小首を傾げ顔を覗き込んでくる。

「そ、そろそろその『あ〜ん』は止めない？」

「え？　でも箸は一膳しかないし」

努めて笑顔で提案するボクに、真帆は素で返してくる。いつもこの調子だから、ちょっと天然なのかもしれない。

「いや、箸くらい持ってくればいいでしょ？　なんだったらボクが持ってくるけど」

「……北斗はこついうのイヤなの？」

うう……何でそこで泣きそうな顔に？　そんな顔されたら返答に困るじゃないか。本当は嫌じゃないんだけど羞恥心が……。

「でも本当は嫌じゃない」

「へ？」

横に居る真帆とは違う位置から、聞き覚えのある声が聞こえてきた。今のつてボクの声の真似かな？

「むしろちよつと嬉しかったり、つて思ったでしょ？」

「あ、サナちゃん。こんにちわ」

先程までの泣きそうな顔から一転して、花が咲いたような笑顔を先程の声の主へ送っている。

……あれ？ さっきの表情は演技？

「シャッス、お二人さん。相変わらずラブラブだね」

「サナ、またそれ？」

「へっへっ、合ってたでしょ？」

わざと大きく溜め息をついたボクにふふん、と得意気に胸を張っている。

「え？ そうだったの？」

「……」

いずみ さなえ

和泉沙苗、何故かいつもボクの心の中の言葉を、精確に読み取る。本人は『女の勘』とか言ってるけど、そんなレベルじゃない。本当は読心術か何かが出るんじゃない……。

「何？ 私のナイスバディに見とれちゃってるの？」

「ち、違うよ」

「確かにサナは背が低いのを除けばモデル並のプロポーションだ。

真帆は……。だつてさ？」

「うえっ！？ どこから読んだ！？」

「大体最初から」

「北斗？」

まずい、凄く怒ってる。サナみたいに心が読めなくてもこれは簡単に分かる。

「あ、いや、ほら、真帆はスレンダーな感じが魅力的だと思うよ？ それにそのショートカットにした髪も、スポーティな感じがして

……」

ボクと真帆の視線が絡み合う。数秒間そうした後、一人だけマイペースなサナが口を開く。

「本心みたいだよ？」

「北斗」

ほっ、真帆に笑顔が戻った。

……絶対読心術だ。

「ところでサナは何しにきたの？」

「え？ あ、忘れてた。真帆、教頭が呼んでたよ？」

「え、ホント？ ありがと、すぐ行くね」

身の回りをテキパキと片付け食べかけの弁当をボクに手渡し、足早に扉の向こうへ向かった。

去り際に「ごめんね、あとは自分で食べてね」と言い残して。

「この前の論文かな？」

「ん、多分そうだろうね。いや、英語のスピーチ・コンテストの話かも」

「まじったく、天は二物も三物も与えるものね」

「そうだね」

我ながら何でボクなんかと付き合ってるかが分からない。まさか他にも彼氏がいっぱいいるとか？ いや、でも真帆に限ってそんなことは……。

「何？ ホクトの他に彼氏がないか心配だっけゆーの？」

「だから人の心を読まないでよ！」

サナの前での思考は自殺行為だということを再認識させられる。間違ってもサナに対する悪口を頭に浮かべてはならない。

「まあまあ、でも全然心配いらなと思うよ？」

「え、何で？」

「何でって……。分からないの？」

素直に頷いたボクの顔を食い入るように見つめ、ふう、と大きな溜め息をつく。

そして呆れ返った様に一言。

「ま、自分で考えなさい」

「考えなさいって……」

人の心なんて考えても解らない。心理学とかの知識があったらちよつとは分かるかも知れないけど、生憎ボクはその分野の知識は持ち合わせていない。そんなボクに含みのある笑みを浮かべ、踵を返す。

「ほいじゃ、私は退散します。アオフ・ヴィーダーゼーエン」

「ん、じゃあね」

アオフ・ヴィー？　なんて言ったかよく分からない言葉を残し、颯爽と扉の向こうへと消えた。

いつも思うけど相手が分からない言語を使っても意味無いよ……。

第三話：秘密の丘

「あ、そうだ。今日もあの場所に行こう？」
「ん、いいよ」

いつもの通学路に入ろうかという所で、突然真帆が振り向く。

真帆が言う『あの場所』というのは、学校の裏にあるボクと真帆の秘密の丘だ。

秘密とは言ってもその場所を知る人は多い。

しかし、そこに至までにある地獄の階段が他のみんなから敬遠され、秘密 彼の誰も知らない と言っても過言でないような場所になっている。

ちなみに車道はないため足だけが頼りだ。比較的運動が得意なボクは難なく越えられるが、発案者の真帆はよく行きたがる割に「ま、待ってよ」と、死にそうになって登っている。

スポーツ万能に見えるスレンダーな体型の真帆だが、人は見かけによらないもので運動全般が苦手らしい。

「よし、今日はサービス。後向きで登るボクに勝ったらジュースを奢ってあげよう」

「え？ ホント？」

「ん」

「じゃあ、よゝい、ど〜ん!」

掛け声だけは頼もしく階段を登り始めた。ウサギが跳ねるようにぴよんぴよんと登っていくが、それも長くは続かず、十秒後には力メの歩みに変わる。まあ、いつも通りだけど。

そろそろボクもスタートしよう。

「真帆、お先に〜」

「はあ、はあっ、ま、待ってよ〜」

あっという間に追い抜くと、いつものセリフが出た。毎度のことながら今にも死にそうな表情だ。

しかし、手は貸せない。以前手を貸そうか？ と訊いた時は、自分の力で登ってこそ、あの景色は綺麗なんだよ、と拒まれてしまった。本当に芯が強いんだよな……。

っと、もう真帆が豆粒の様になってる。これだけ差があれば大丈夫かな。

そう思い地獄の階段の途中にある細い道に入っていく。

目当てはその先にある小さな池だ。

森林の中にも関わらず、台風の目の様に木々が開けているそこは、今日も変わらず光が降り注いでいた。ここにだったら何時間でもいられるな……。

「はあっ、はあっ、はあっ」

「……昔話みたいになっちゃったな」

丘の上でガツクリと頂垂れるボクと、半分死に掛けている真帆。

先程の勝負は真帆の大勝利に終わった。

理由は言うまでもなく、池に居る時間が長すぎた為だ。ホントにウサギとカメだよ……。

「はあ、はあ、はあ……北斗って何で息切れないの？」

「ん？ さっきの昼寝でスタミナは満タンだからね。そんなことよ
り、いつもの所に行こう」

「はあ、はあ……うん」

「はい、ジュース。りんごでいいよね？」

「うん、ありがとう」

ボクと真帆の指定席　丘の上に唯一あるベンチ　に座り、いつものように景色を眺める。

ちなみに真帆はりんごジュース、ボクはアップルティーを飲みながらというのも定番だ。

「やっぱりいつ見ても綺麗だね」

「ああ」

キザな人ならここで『君の方が綺麗だよ』とか言うんだろうな…

…。

もちろんボクは言わないけど。

正確には言えない、かな。

「どうしたの？」

「へっ？　あ、いや……。あまりに景色がいいから眠くなってきちゃったな〜と」

「毎度の事ながら早いね」

焦って適当に誤魔化したかの様だが、実際ボクはここにくるといつも熟睡する。

専用の枕を使って

「まあまあ、それが灌本北斗たる所以なんだし。というわけで、おやすみ〜」

コテツと真帆の太腿に頭をあずけ、目を閉じる。

俗に言う膝枕だ。

「はいはい、おやすみなさい」

真帆の優しい声を聞いた数秒後、ボクは深い闇へと落ちた

第四話：夢

ボクは昔から夢をみる。ただの夢じゃなくて、未来を映す『予知夢』と呼ばれるものをだ。

他の予知夢をみる人はどうかしらないけど、ボクの場合は二つの夢を断片的にみる。

しかもその二つの夢の内、一方は必ず実現するという、面白いを通り越して厄介なものだったりする。

ボクを包んでいた暗闇が一変して色付く。

あ……真帆だ。幸せそうに笑う真帆と話しているのは……ボク？

次は……二人でカレンダーに印を付けている。そういえば見たい映画があるって言ってたっけ。

日付は六月十一日、今度の土曜日か。

え？ 真帆？ 次の場面ではどこかの道路で真帆が倒れている。

その頭からは夥しい量の出血、真帆のすぐ傍では泣き叫ぶボクの姿が見える。

素人目に見ても、真帆の容体は転んじやったとかそんな生易しいものじゃない。

まさか……。ボクと映画を見に行く途中？ 何かの間違いじゃないのか？

そんな思考を他所に再び暗闇に包まれる。

これが一つ目の未来？ 真帆が死ぬ？

あ……。結論が出ないまま次の夢が始まる。

今度は薄暗い教室で向き合っているボクと真帆。ボク表情は読み取れないけど、真帆は何故か泣いている。

次は……ボクとサナが楽しそうに屋上で弁当を食べている。

真帆と何かあったのに何で楽しそうにしているんだ？

三度暗闇に包まれ、これで終わりかと思いきや、よく見ると暗闇の中でボクが横たわっていた。

先程の真帆と同じ様に頭からは大量の出血。また……死んでいる？

その傍らには何かを悟っていたかの様なサナの姿。
そこで今度こそ完全に夢が途絶えた。

「っ！」

必死の思いで目を開けると、息のかかる距離で真帆が小さく寝息を立てていた。

その安らかな寝顔でここが現実世界であると認識させられる。

「ん……あ、北斗。おはよ」

「う、うん。おはよ」

確かにいつもの丘に来て、いつもの様に昼寝をして

「どうしたの？ 顔色悪いよ？」

「……」

予知夢を見た特有の疲労感。間違いない、さっきの夢はいつもの予知夢だ。

「北斗？」

「ごめん、ちょっと用事思い出したから帰るよ」

「え、あ、うん。じゃあ私も」

「あ、ちよつと急ぐんだ」

慌ててカバンを持ち立ち上がろうとする真帆を手で制し、努めていつもの苦笑をつくる。

「そう？ わかった、気を付けてね」

「ん、真帆も気を付けてね。じゃあ、またね……」

整理してみよう。

一つ目の夢では、ボクと真帆が今まで通り一緒にいた。

六月十一日に映画を見に行く約束をして、恐らくその日に真帆が事故か何かで死に至る。

今までの予知夢を振り返ってみても、未来との繋がりが無い場面は見えなかったから、その可能性はかなり高い。

そして、二つ目の夢は真帆が泣いているところから始まった。恐らく放課後の学校で……。

次の場面では、一変してボクとサナが屋上で弁当を食べていた。

しかも真帆がそのままサナに入れ替わった様に楽しそうだった。

最後はボクが真帆と同じ様に死んでいた。

……ボクと真帆、ボクとサナがそれぞれ一緒にいる事によって起こる未来だ。

つまり、このまま真帆と一緒に過ごすか、サナと過ごすかで未来が決まる。

ということとは、二つ目の夢で真帆が泣いていたのは、ボクが別れを告げた事が原因？

そして表面上かもしれないけど、サナと付き合う形になった？

それなら夢の流れは筋が通る。

このどちらかを選ばない場合はランダムでどちらかが現実のものとなる。

これは今までの経験上間違いない。

真帆が死ぬかボクが死ぬ、そのどちらかの未来を選択、か。

.....
.....
.....。
のはつ、何悩んでるんだろ。答えなんて考える前から決まってるの。
ボクの代わりに真帆に死んでもらうなんて馬鹿げている。
だからボクは

第五話…さよなら

「残らせてごめんね」

「うん、今日は何も用事なかったから」

夕日に染まる放課後の教室でボクと対面している真帆。

既に下校時刻からかなり時間が経っている為、教室にはボク達以外の人影はなく、シンと静まり返っている。

「そっか。真帆に伝えなくちゃならない事があってさ……」

「うん、何？」

いつもの様に笑顔で優しく促す真帆。昨日までならそのお陰で快く会話が出来た。

しかし今回に限っては彼女の意に反して、ボク言葉を抑制している。

「れよう」

「え？」

「ボクと別れてほしいんだ」

「え？ 何？ ……あ、またいつもの冗談？」

ボクの言葉に困惑している真帆だったが、数秒後には一転して笑顔に変わる。

いつもの屈折のない笑顔がここにある。

そして、それを今から壊そうとしているボクがいる。

「違う」

「もう、今日は騙されないからね？ それにその冗談ちょっと酷いよっ」

真帆との数え切れない思い出の数々が走馬灯の様に頭を過ぎる。

「冗談じゃないよ。他に好きな人が出来たんだ」

「しつこいよ？ そんなことより早く」

「真面目に聞け……」

「っ!?!?」

自分でも驚くほどの大きな声で真帆が萎縮する。
その驚き方に一瞬決意が揺らいたが、大きく息を吸い込みなんと
言葉が続ける。

「……ごめん。でも別れて欲しいのは本当なんだ」
「……」

何とか笑顔を作ろうとする真帆。

しかしそれは失敗に終わり、少し引きつった泣き顔になっていた。
それは見ているボクも辛くなる程痛々しい表情だ。

「ど、どうして？ 昨日までは」

「真帆」

ボクの呼び掛けに今までの不安な表情を崩し、若干だが安堵を見
せる。

恐らく『冗談だよ』と言うのを待っているんだろうけど……。

これから言う事は真帆が聞きたくないのは勿論、ボク自身も言
たくない事だ。

一度目を閉じ気持ちを落ち着かせ、もう一度真帆の目を見る。

「もともとボク達は 付き合ってたなんていなかった」

「え？ どういう……意味？」

「そのままの意味だよ」

「何言ってるの？ 全然……意味が分からないよ？」

先程よりもさらに悲愴な面持ちに変わる。

その表情とボク自身の言葉でズキズキと胸が痛む。

しかし、続けなくてはならない。

「じゃあ聞くけど、どっちが告白して付き合いたしたか覚えて
る？」

「っ！ それは……」

その問いに真帆が答えられるはずがなかった。

何故ならボクと真帆はどちらからも告白してないからだ。

もともと仲が良かったせい、周りの人からは雰囲気だけで『恋人
同士』と思われ続け、どちらも否定しないまま過ごしてきた。

実際真帆の事は恋愛対象としても好きだった。それに悪い気もしなかったから、ボク自身も真帆のことを彼女だと思いついていた。

「……。『別れよう』って言うのもおかしいね。もともと恋人同士じゃなかったんだし」

「で、でも今までは」

「ボクにとつてのサナ、真帆にとつての大地みたいな人と大して変わらないよ」

思考とは裏腹に、今までの真帆と過ごしてきた日々を壊していくボク。

もう引き返せない

「ウソ」

「……」

「ウソ……だよな？ 冗談だよな？」

ボクだってウソだって謝りたい。

冗談だって笑いたい。だけど

「ウソでも冗談でもないよ」

既に真帆の両目からは涙が溢れ出ていた。

昨日までのボクならその涙を拭いてやる事が出来たが、今となつては出来るはずもなく、悲しみに暮れる真帆を見る事しか出来なかった。

「じゃあ、ボク帰るよ。もう真帆とは会わない。……さよなら」

「北斗……」

ボクの名前を呼び泣き崩れる真帆を背中に感じ、ズキズキする胸を押さえ教室を出る。

これでよかったんだ。

これで

「ちょっとは我慢しなよ」

「……」

たぶん涙でくしゃくしゃになつていいるボクを、突き当たりの廊下で待ち構えていたのはサナだった。

その表情はどこか草臥れている。

「やっぱり未練があるんでしょ？」

「当たり前だよ。ボクは今でも真帆が……大好きなんだ」

「はあ、じゃあ彼女役やめようか？」

既にサナには予知夢の事を話してある。

……読まれたともいうけど。

とにかく辻褄を合わせるために、サナには真帆と別れた後の彼女役を頼んである。

夢とのリンクを深める、という意味でも仕方がない選択だった。

「いや、頼むよサナ」

「あゝもう！ そんな捨て犬みたいな目で見ないでよ。ちゃんと演技してあげるから」

「ありがとう。あ、お礼に今度何か買ってあげるよ」

「形見になっちゃうね」

「うぐっ」

なんか凄いテンション下がる。そうだ、十一日にボクは死ぬんだつた。

先の事なんて考えるだけ無駄か……。

「いちいち落ち込まない。ほらっ、一緒に帰ろう」

「ん、わかった」

本当の恋人の様に腕を絡めてくるサナ。

まるで昨日までの真帆の様に

「で、いつ死ぬんだっけ？」

「……もうちょっとオブラートに包んで発言してよ。今何かが心臓を貫いた」

「あ、ごめんごめん。で、いつ？」

「百年後」

「というのはウソで六月十一日。こう思ったら分かるのかな？」

「ああ、十一日か。あと三日くらいだね？」

「せうかい。ねえ、死ぬ前にボクの心を読む絡繰りを教えてくれな
い？」

「死んだら墓前で教えてあげるよ〜ん」

「……はは、楽しみにしてるよ」

「死んだ後の楽しみが一つ出来た……と考えるのがいいのかな。」

「どうせあと三日でボクは死ぬんだ。」

「残り少ない時間をどう過ごすそうと大した問題じゃない。」

真帆との関係を絶つ以外は

第六話：本音と演技

「ふう、もうすぐ死ぬのに学校来るってゆーのはなあ……」

昼休みの屋上は今日も例外なく蒸し暑かった。

いや、昨日の夕立が災いしてか、何時にも増して蒸し暑い気がする。

「しょうがないでしょ？ 学校来ないと真帆に嫌われるチャンスがないんだから」

いつもの様に屋上で昼食を取ってはいるが、昨日までとは違い、隣に真帆がいない。

真帆がいた場所には彼女代理のサナがちょこんと座り、律儀にも作ってきてくれた弁当と一緒に頬張っている。

「……ん、サナって料理上手いんだね」

「え、ホント？ あんまり北斗の好みが分からなかったから、私の好物ばかりなんだけどね。」

私と北斗の味覚は似てるのかな？」

珍しく興奮気味で喋ってるな。いつもボクより上手なサナが動揺する姿……ちよつと面白いかも。

「そうかもね。とにかくどれも美味しいよ」

「あ、ありがとう」

心なしサナの頬が赤く染まっている。

サナがこんなに女の子らしい反応をするとは……。

そういえば真帆にも「美味しい」なんて感想言ったことなかったな。

「はいつ、じゃあアーンして？」

「ええっ！？ 何でいきなり！？」

「いいじゃん、ほら早く」

「やゝめゝてゝ あ」

今ボクとサナが座っているのは、ドアから数メートル離れたベン

手。

当然ドアから出てきた人物とも数メートルの距離になる。

「……真帆」

たちまち重い空気が辺りを包み込み、三人とも石像の様に動けないでいる。

「……何しに来たの？」

「え？ えっと……」

ずっとこのままの状態が続くと思いきや、突然隣にいたサナが口を開く。

ボクと同様、意表を付かれた真帆はオロオロしている。

「私と北斗はお食事中なんだよ？ 真帆は何しにきたの？」

そう冷たく言い放つサナは、日常では考えられないほど厳しい口調だ。

表情からは真帆への敵意が見て取れる。

「えっ……と。ほ、北斗にお弁当を作ってきたんだけど……」

「いらないよ。私がつってきたから。ね？ 北斗？」

「え？ ……うん、もう弁当はいらないよ」

サナはボクから真帆を遠ざけるために厳しい口調で話しているが、肝心のボクは気の抜けた事しか言えていない。

真帆を遠ざけるには生半可な対応じゃ意味がない。

それはボクが一番知ってるはずなのに……。

「そ、そっか。北斗はサナちゃんと付き合ってるんだね」

「ん……」

「そう、真帆はもう北斗とは何ともないんだから、あんまり近づかないですよ？」

「う、うん。ごめんね……」

以前は仲良しだった二人が、ボクのせいで険悪なムードになっている。

二人はどんな気持ちなんだろうか？

サナは演技だろうけど、何も知らない真帆は

「……じゃあ、私は教室に戻るね。邪魔してごめんなさい」
「あ……」

最後に一度ボクに視線を送り、ドアの向こうへ消えていく。
涙こそ浮かんでいなかったが、悲しい光を放つ瞳が頭から離れな
い。

「……サナにも迷惑かけてごめんね」

「ホントだよ。北斗がもっと非情にならないと、私がドンドン悪者
になっちゃう」

「うう、ホントにごめん」

このままだとボクがいなくなった後、サナが真帆に嫌われてしま
う。

ボクと真帆の関係は壊す必要があるが、真帆とサナの関係までは
壊したくない。

……いや、もう遅いのだろうか？

「今さらだけど、本当に嫌なら彼女役やめてもいいよ？」

「ホントに今さらだよ。もう乗り掛かった船なんだから、最後まで
やり抜くしかないよ」

「そっか。……ありがとう、あと数日頼むね」

「あいあい、沙苗さんに任せなさい」

サナもここまでやってくれてるんだ。ボクも半端な気持ちは捨て
よう。

「あの……北斗？」

帰りのホームルーム終了直後、努めて笑顔　もちろん以前に比
べると、かなりぎこちない笑顔　の真帆がボクの机にやってきた。
言葉にこそしていないが、目が『一緒に帰ろう』と言っている。

「……悪いけどパス。サナと帰るから」

「あ……そつか。じゃあ、またね」

落胆したのを必死に隠そうと、飽くまで笑顔を作りその場を去ろうとする。

『またね』と言っているからには、また来るつもりだろう。

まだ足りないのか……。

「真帆」

「え？ なに？」

呼び止められるとは思っていなかったのか、驚きと期待を込めた目でボクを見ている。

それを見据えながら、小さく唾を飲み込み声を絞り出す。

「……もう来なくていいよ」

「え？」

「ボクと真帆はもう何にも繋がりはないでしょ？ それに昨日『真帆とは会わない』って言ったはずだけど」

「っ」

下唇を噛み締め、涙を必死に堪えているのが分かる。

そんな真帆を前にして、ボクはどんな表情をしてるんだろう？

「うん……そっだよ。ごめんね、しつこかったよね？ じゃあ、

さよ……ならっ」

最後は溢れだす涙を我慢出来ず、完全な泣き顔を見せ教室を後にする。

真帆とはクラスが違うから、こう言っておけば会う機会は極端に減るはずだ。

今の出来事にクラスメートは何事かとボクに視線を送っている。

そしてその中の一人、大地が歩み寄って来る。

「おい北斗、今のはなんだよ？ お前ら喧嘩でもしたのか？」

いつも通りの口調だが、滅多に見せることのない険しい表情をしている。

「別れた」

「は？」

「真帆とは……別れたんだ」
「な!？」

ボクの言葉に心底驚いた様な大地は、
しばらくボクの顔を覗き込んだ後『まあ、お前にも色々あるんだろ
うな』と言い残して去っていった。

一応大地なりに気を遣ってくれたらしい。こういう気遣いが大地
のいいところだ。

と、感傷に浸っていると、突然目の前が真っ暗になる。

あれ? また夢の中?

「だ〜れだ?」

光が失われた直後、色つばい声が耳元で囁かれる。

「……サナ?」

「せいかわい。よくわかったね?」

「こんなことするのはサナくらいしかいないよ」

本当は微かに香った香水で分かった。

サナからはいつもいい香りが……って今のボクってちょっと変態?

「……えっち」

「ええ!？」

しまった! サナの前じゃ口に出したも同然だ! 顔を真っ赤に
して睨んでる……。

「ご、ごめん」

「もっつ。……まっ、正解した事に免じて許しましょう。そしてさ
らに沙苗さんが一緒に帰ってあげます」

「わ〜い」

わざと大袈裟に喜んでみせる。またいつものツッコミが来るかな、
と思ったが特に気にした様子はなく、むしろご機嫌な様だ。

「じゃ、今日は駅前のアイス食べに行こう? もちろん北斗のおご
りで」

「ん、わかった」

今の流れでは『おごり』という言葉に反論は出来ない。

サナのこういつところには感服するな。
それはそうと駅前のアイスか。
あそこはよく真帆と 考えるのは止めよう。
思考を停止させ、差し出されたサナの手を握った。

第七話・ゆらぎ

「くと……ほく……」

遠くで誰かが呼んでいる。しかし囁く様なその声は、ボクを覚醒させるまでには至らない。

そしてその声も徐々に遠のいていき

「起きろ！」

「!?!」

再び訪れかけた暗く静かな世界が一変し、凄まじい衝撃が後頭部に走った。

気のせいか、小さな星がいくつも見える。

……今のは一体何だ？

「つたく、わざわざお前の為に来てやったのに眠り惚けてるんじゃないねえ」

「ボクの為？」

「うむ、正しき道へと導いてやる」

クラクラする頭をあげると、仁王立ちしている大地が視界に入る。よく見るとその右手には広辞苑が……。

「まさか、それで殴ったの？」

「いかにも。最初は優しく起こしてやったんだが、全く反応がなかったからな」

「だからって広辞苑で殴らなくても……」

「えい、うるさい！んな事よりお前に話がある」
強靱な握力でボクの腕を引っ張る大地。

その力の込め方から、平穏な話じゃない事が分かる。

「えいと、後じゃダメ？」

「ダメだ。まあ、さすがのお前も今の時間を聞けば起きる気になるだろう」

「時間？ 今何時？」

「十二時過ぎだ」

「ええ！？ もうお昼！？」

「まずい、最近授業中の記憶が全くない。テストが近いのに……。あつ、もうじき死ぬボクには関係ないか。その点に関してはラッキーだな。」

「おら、ボーツとするな。オレはお前ほど暇じゃないんだ」

「ほつくとつ、お昼行こ」

「タイミングがいいのか悪いのか、

サナがお弁当が入っているであろう包みを、グルグル回しながら教室に駆け込んできた。

「……中身は大丈夫かな？」

「あ、サナ。よし、行こっか」

「だゝめだ。和泉、ちよつと北斗を借りるぜ」

「えゝ？」

「反論は受け付けん」

「で、話つて何？」

「ようやく解放された手を擦り、改めて大地の顔色を伺う。」

「……この表情は、間違いなく怒ってる。」

「うむ、単刀直入に言おう。お前は間違っている」

「え？ 何が？」

「お前のとつた行動がだ」

「……真帆の事？」

「当たり前だろ。お前にどんな理由があるかは知らんが、あの態度はひど過ぎる」

「やっぱりその事か。自分でもやり過ぎたかも、って思ってたから当然かな。」

「でも昨日は『お前にも色々あるだろう』って納得したじゃないか」
「あの時はあの時だ。今水野がどうなってるのか知ってるのか？」
「真帆が？ それはあれだけ急に冷たくすれば落ち込むのも無理はない。」

「どうなってるの？」

「お、やっぱりまだ気にはなるんだな」

「……」

「なんだ、急に黙りか？」

これ以上の発言は余計大地のペースにハマりかねない。

少しでも未練を見せちゃダメだ。

「ま、別にいいけど。今の水野はな、ハッキリ言って廃人と化している」

「廃人？」

「ああ、一応学校には来てるけど、登校してから一度も席を立つてない。」

「それどころか小さなアクション一つ起こさない」

「……」

「誰が何を言っても反応しない。カバンなんか手に握ったままだ」

大地の話で嫌でも生気の抜けた真帆の顔が浮かぶ。

今一番見たくない表情だ。

「分かるよな？ お前の態度が原因だ」

「ん……」

「ん、じゃないだろ？ それが学年一のアイドルを一方的に振って、廃人に追いやったヤツのセリフか？ 何とかしろよ」

「……」

「しかも信じられん事にあの和泉と付き合ってるときた。これじゃあ水野があまりにも可哀相だ」

「大地には関係ないじゃないか」

「何〜！？ っつて、まあ、そうだよな」

「へ？」

今までの険しい表情を崩し大げさにヤレヤレ、というポーズをとる。

「いや、ここまではクラスの奴らの想いなんだ。そしてココからがオレの本音」

相変わらず回りくどいけど、それが大地らしい。

しかもこの空気での発言は、核心をついてくる可能性が高い。

「いいか？ 水野はお前を待っている。そして北斗の心はまだ水野の傍から離れていない」

大地が言っていることは多分事実だ。

自覚があるだけにその言葉が重くのしかかる。

「つつーわけだから、行ってやれよ。彼女のところ」

「……ダメなんだ」

「何がだ？」

「もう真帆とは会っちゃいけないんだ」

「……」

「ボクだって本当は」

真帆に会いたい。

ずっと一緒にいたい。

「そ、そうだ。大地が真帆を元氣付けてあげてよ」

「何でオレが？」

「結構仲いいでしょ？ この際真帆と付き合っつていうのは」

「本気で言ってるのか？」

再び普段は見せない攻撃的な表情に変わる。

大地の雰囲気は飲まれない様に、小さく一呼吸を置く。

「……真帆をこのままにしておくよりはいいと思う」

実際大地なら真帆と上手くやっていけると思う。

ここ一番で頼りになる大地は、優柔不断なボクなんかよりもずっと真帆に相応しいはずだ。

「腑抜けた事言うな」

「え？」

「人に頼るなって言ってるんだよ。自分のことくらい自分で始末付ける」

「……ボクなりに始末は付けたよ」

「その考えが気に食わん。いいか？ オレはお前達が付き合おうが別れようが関係ない。」

「だがな、お前の不始末のせいで友達が傷つけられるのが許せないんだよ。」

「別れるなら別れるでちゃんと事情を」

「……」
「ないよ」

「あ？」

「話せるわけないよ！ 事情なんか！」

「……」

三度大地の表情が険しくなる。

そして、二人の間には一触即発とっていい空気が漂っている。

幸いなことに周りに人はいない。

今なら誰も止めに入らない。

「……はあ、わったよ。悪かった、オレはもうこれ以上口出しはしない」

またいつもの親しみやすい表情に戻り後頭部をポリポリと搔く。

しかし、その瞳だけは強い意思を秘めているのが分かる。

「だが最後に一つだけ言わせてもらおうぞ」

「何？」

「オレはお前を信じている」

「え？」

「じゃあな」

「あつ、大地っ！ 大地は」

ボクの呼び掛けに答えるのを拒否するかの様に、背中を向けたまま手をヒラヒラさせる。

言いたいことだけ言って逃げたな。

……いや、逃げてるのはボクの方が。

……本当にこのままでいいのか？

ボクは

「北斗？」

気が付くと心配そうに弁当を抱えたサナがすぐ近くまで来ていた。

この様子じゃさっきの話は聞かれてたかもしれない。

「あ、何？」

「お弁当、どうする？」

「……ごめん、今日はいいや」

「そっか……」

第八話：決意

「好きだな、ここ」

「ん、ボクも割と好きだよ」

放課後サナに連れてこられたのは、秘密の丘への階段を少し降りたところにある森林公園。

その名の通り木々で覆われていて昼でも薄暗い。

さらにその遊具はかなり古く、立ち入り禁止区域も設けられている為、『死体が埋ってそう』『薄気味悪い』等と近辺の人からの評判は悪い。

ボクは静かだいいと思うけど、真帆が恐がりだった為あまり来る機会はなかった。

「じゃあ今度キモ試しでも　って、今度はないか」

「……明日だから」

「と」

「え？」

サナとの間に吹いた強い風が言葉を掻き消した。

そして、その風は意志を持っていくかの様に、今度は周りの音を完全に消し去る。

「ずっと、こうしてたかったな」

いつもの躍動感に溢れた声とは全く別の、絞り出した様な声が静かに響いた。

「サナ？」

俯き加減で表情は読み取れないが、心なしか身体が震えている。

それは見ている方も不安になる程頼りなく、今にも壊れてしまいうちにさえ感じる。

「私、いやだよ。もう北斗に会えなくなるなんて」

「……サナなら知ってると思うけど、ボクの子知夢は絶対に外れないんだ」

「わかってるけど……北斗に、死んでほしくない……」

「サナ……」

「だって私ね」

強い意志を秘めている瞳がボクを捉える。

そして再び吹いた風に乗せる様に口を開いた。

「北斗の事が好きだから」

言葉が出なかった。

全身が動かない。

「……あははっ、やっと言えた」

必死の思いで口を動かしても声が出ない。

視界に映るサナは、どこかホツとした様に笑顔を取り戻している。

「こつという風に言えばよかつたんだね」

「あ……」

笑顔になつたはずのサナの目には、薄っすらと涙が浮かんでいた。その表情を崩さないまま、依然動けないでいるボクの胸に軽く頭を預ける。

「ボクは……」

「ごめんね？ いいんだ。結果なんて最初から分かつてたから」

言いながら身体を離し、背を向ける。

そして微かに残る温もりを胸に感じながら、真っ直ぐにその姿を見据える。

「私ね？ 北斗が真帆と別れるって聞いた時、心のどこかで『嬉しい』って思っちゃったんだ。真帆と別れたら、北斗が私に振り向いてくれるかもって。最低だよな？ そんな事を考えちゃうなんて。北斗の置かれてる立場だって、運命だって知ってるのに……」

サナが友情とは違う感情を抱いていたのは、何となく分かっていった。

真帆と付き合っていた頃はその感情を抑え、良き友を演じていたのも薄々感じていた。

それがここ数日 真帆と別れて恋人役を頼んだ時から、徐々に気持ちが抑えられなくなっているのも分かっていった。

その気持ちを知っていながら、都合良く好意を利用してしまった。真帆と向き合うことも、サナの気持ちに応える事も出来なかった。最低なのはボクの方だ。

「ごめん……全部ボクが悪かったんだ。ホントにごめん……」

「ううん、謝らなくていいんだよ？ 恋人のフリでも嬉しかった。限られた時間を一緒に過ごしてくれて、ありがとう」

「サナ……」

『ありがとう』という一言で、不思議と心が軽くなった。

しかしそれに続き、何もしてやれない事に対する悲しさも湧き上がる。

「ホクト」

「ん？」

「真帆のところに行ってあげて」

「で、でも……」

相変わらず優柔不断なボクに、親しみを込めた様な清々しい笑顔を向けてくれる。

今まで何度この笑顔に勇気付けられただろうか。

「大丈夫、真帆は今でもホクトを待ってるよ。ホクトだって」

「ボクだって？」

「ずっと、真帆の事考えてた」

「え……？」

「全部分かってたよ。私といる時も真帆の事ばかり考えてた。ホクトの目に私は映ってなかったんだよね」

サナの言う通りかもしれない。

どこで何をしていても真帆を想い出していた。

目の前のサナを通り越して真帆を見ていた。

それが分かっても、ずっと明るく振る舞っていてくれていたのか……。

「お願い、真帆のところに行って」

「でもサナが」

「私は大丈夫だから。……ほら、シャキッとしてっ！
そういいながら背中をバンツと叩く。

サナが戻っていく。良き友であったあの頃に

「ごめん」

「もう謝らないで。私が惨めになっちゃうでしょ？」

「そっか……ありがとう」

「うん、それでよし。ビシッと決めておいで」

「ん、行ってくる」

踵を反し立ち去ろうとするが、袖にささやかな抵抗を感じ停止する。

振り返るとサナの指がそっと袖を掴んでいるのが分かった。

「サナ？」

「あ……あははっ……ごめん、言ってるそばからこれじゃ」

「ボクさ、何とか生き延びる道を探してみるよ。未来を変えるんだ。

そしたら……キモ試し、一緒に来ようね？」

「あ……うん！」

会心の笑みで見送りだされ真帆の元へと走り出す。

どこにいるのかは知らないけど『分かる』。

もう振り返らない

第九話：告白

オレはお前を信じている

ビシツと決めておいで

二人の言葉が頭を過ぎる。

ボクは一人じゃなかった。

こんなにも頼りになる友達がいた。

一人で抱え込む必要なんてなかったんだ。

登り慣れた階段を越え、広場を全力で駆け抜ける。

その先のベンチには

「真帆……」

いた……。いつも二人が座っていたベンチに、真帆は静かに座っていた。

「……北斗？」

いつもの様に笑顔を向けてはくれず、背中を向けたまま、消え入りそうな声だけが返ってくる。

「そうだよ」

出来る限り気持ちを落ち着かせ、穏やかな声で応えるが、それでも真帆は動かない。

「真帆？」

「……どうしたの？ サナちゃんは？」

最初に聞いた声よりは、いくらか大きくなった声に少し安堵する。しかし、瞬きをしている間に消えてしまいそうな儂さは変わらない。い。

息を飲み込み、消えてしまわない様に真帆の背中を見据え、声を絞り出す。

「今から全部話すよ。聞いてくれる？」

「……うん」

依然背中を向けたままの、真帆の弱々しい声が耳に届く。真帆をこれほどまでに傷つけたのはボクだ。

理由はどうあれ、ここまでしてしまった責任を取りたい。

そして、何より真帆の笑顔を取り戻したい。

大きく深呼吸をし、真帆に語りかける。

「ボクは」

それからボクは全てを話した。

未来の映像の事、真帆が自分が死ぬのを知った事、別れば真帆が助かる事、サナに恋人役を頼んだ理由、サナの気持ち

そして、そのサナが笑顔で背中を押してくれた事

その全てを嘘偽りなく伝えた。

その間も真帆は微動だにせず、じっとこちらに耳を傾けているだけだった。

「今のが全部……」

「……」

「真帆が死ぬ夢を見た時……どうしたらいいか分からなかった。

ただ真帆を死なせたくないだけ、強く願ったんだ。

でも、ボクが間違ってた……臆病だったんだ。……本当にごめん」

全てを話し、謝罪の言葉を口にすると、途端に全身の力が抜け、膝から崩れ落ちる。

真帆の姿は見えなくなるが、気配だけを頼りにその存在を感じている。

「……北斗」

その言葉の直後、真帆の気配が近づいてくるのが分かる。

同時に心臓が張り裂けそうな程の緊張がボクを襲う。

「私は北斗の事、ずっと信じてたよ」

突然視界が暗くなり、温かく優しい感触に包まれる。
一瞬何が起きたか分からなかったが、懐かしい感覚で全てを悟った。

「……真帆……ごめん」

「うづん、話してくれてありがとう」

『ありがとう』という言葉を聞くと、何故か急速に胸が熱くなり無意識に口が動く。

「ボクは……まだ死にたくない」

そして、その言葉を口にした途端、涙が溢れだした。

いくら我慢しようとしても、頬を伝うそれは一向に止まる気配はない。

そのまま真帆に抱かれ泣き続けた。

その間も真帆は何も言わず、ただ優しく抱いてくれていた。

ようやく涙が止まったのは、夕方も過ぎ、すっかり日が暮れてからだった。

「うわ、ごめん……服が」

思いつきり泣いたせいで、真帆の制服はびしょ濡れになっている。薄手のシャツがちよっと透けて……。

「……ごめんなさい。」

「気にしなくていいよ。代わりに『明後日』いっぱい付き合ってもらうから」

「真帆……」

明後日……。明日を越えなければ明後日はこない。

明日の死を乗り越えられなければ

「ほら、そんな顔しないで。笑顔笑顔」

ニコツと笑ってみせ、ボクに手を差し伸べる。

その笑顔に内心ドキッとしながらも何とか笑顔を返し、その手を握ろうと手を伸ばす。

しかし、ボクの手は真帆の手に触れる事なく、空を切った

最終話：ミエナイチカラ

手を伸ばしたままの真帆が、不思議そうに小首を傾げている。

「あれ？ はは、オカシいな」

そんな真帆にもう一度手を伸ばすが、何故か手に触れる事が出来ない。

「ほく……と？」

何度手を伸ばしても手が届かない。

差し出された真帆の手が遠ざかっていく。

「え？」

違った。

遠ざかっているのは

ボクノホウダッタ。

「!？」

そう認識した途端、全身に恐ろしい力が掛かった。

尋常ではない力で後方へと引つ張られている。かと思つと、突然身体が前方に引つ張られ、真帆の直ぐ横を通り過ぎる。

「北斗!？」

一瞬で青ざめる真帆を横目見た瞬間、何とか反転し踏ん張ったが、ボクの身体はズルズルと崖の方へ引き摺られていく。

「うつつ」

全身の骨がミシミシと軋んでいる。

これは一体

「北斗!」

恐怖と驚愕の入り混じった表情の真帆が、ボクにしがみ付く様に引つ張るが、それでも見えない何かの力には遠く及ばない。

「だ、ダメだよ真帆! 離れて!」

「いや！ 北斗は死なせない！」

そんなボク達を他所に、背中では金属製のフェンスが嫌な音を立て、その耐久力の限界を知らせている。

「放してよ真帆！ このままじゃ真帆まで」

死ぬ。

「ダメ！ 置いて行かないで！」

「っ！」

さらに力は増し、声も出せなくなる。

そして、全身の骨が軋む耳障りな音が恐怖を掻き立てる中、一つの結論が頭に浮かんだ。

そうか。

真帆が死ぬのは明日。

でも……

ボクが死ぬのは

「あ、真帆。こっちこっち」

「はあ、はあ……遅れて、ごめんね……はあ」

いつもの様に約束の時間を五分程遅れて、待ち合わせ場所に到着する真帆。

毎度の事ながら肩で息をして苦しそうだ。

「あのさ、一応聞くけど今日はどうしたの？」

「うん。いつもより十分早く出たんだけど、来る途中で転んじやつて……」

「家に帰って着替えて来たら遅れちゃったの？」

「うん。……ごめんなさい」

シヨボンと肩を撫で下ろす。

そんな真帆を見て『可愛い』と思ってしまうのは不謹慎だろうか？

「ん、気にしないで。ほら、映画始まっちゃうよ？」

「うん。……ありがとう」

ボン、と頭を叩いて笑顔を向ける。

すると真帆もいつもの様に笑顔を返してくれる。

こんな何気ないやり取りに幸せを感じる。

真帆と一緒になら、どんな事だって乗り越えられる。

これからも、ずっと一緒に笑っていたい
ずっと

目を開けた。

視界には一面に灰色が広がっている。

音は何も聞こえない。

僅かに感じるのは液体の感触。

……あ。

「！　！」

真帆？　……真帆だ。

必死に口を動かしてるが何も聞こえない。

『何を言ってるの？』

そう言ったつもりだったが、声は出なかった。

「　」

何で泣いてるの？

真帆？ 聞こえないよ。

……。

……。

……。

あれ？ 急に眠くなってきた。

泣き止んでよ、真帆。

そんな顔されちゃ、安心して眠れないよ。

…… ああ、ダメだ。眠い。

ごめんね、真帆。

ちよつと寝たら話を聞くから。

オヤスミ

エピローグ：夢の終わり

晴れ渡る青空の下、駅前のベンチで一人の少女が腰掛けている。チラチラと腕時計を見ては溜め息をつき、幸せそうに目を閉じる。もうかれこれ一時間近くそれを繰り返していた。

「お、水野？」

「え？」

不意に前方から長身の少年に声をかけられ、少し驚いた様に顔を上げる。

「あ、本当だ。やつほー真帆」

「サナちゃんに大地君。こんにちわ。二人でデート？」

二人の姿を見ると、途端に花が咲いた様な笑顔を浮かべ、立ち上がる。

「ば〜か、違うよ。ちよつと買い物に付き合ってるだけだ」

その万人を幸せにする様な笑顔を前にしても動じる事なく、気だるそうな声を上げ、やれやれと首を振る大地。

「え？ ひどい、デートじゃなかったの？ 私楽しみにしてたのに

……」

「ええっ!？」

今にも泣きだしそうな沙苗の表情を見ると、一瞬で動揺を露わにする。

大地に自覚はないだろうが、その姿は微笑ましい。

「な〜んてね。うっそぴょ〜んっ」

「……おいおい、あんまり驚かすなよ。オレはピュアなんだ」

そんな二人を優しく見守る真帆。

その視線に気付いた大地が、コホンと小さく咳をして真帆に向き直る。

「水野は誰かを待ってるのか？ っと思問だったか」

「こんな所にいるって事は 」

二人揃って含みのある笑みを真帆に送る。

それに耐えかねたのか、一気に頬を赤らめ小さく声を絞り出す。

「……………う、うん。二人の想像通りだと思う」

真帆の予想通りの反応に満足したのか、突然大地がクルリと踵を返す。

「あゝあゝ、相変わらず妬けるな。和泉、邪魔者は退散だ」

「りょうかゝい。じゃあね、真帆」

「うん、またね」

遠ざかる二人の背中を見送り、再び時計を見る真帆。

時計は先程から五分も進んでいない。

小さく溜め息をつき青空を見上げ、ゆっくりと流れる小さな雲をただ眺める。

しばらくそうしていたが、痛めた様に首に手を当て、顔を下げた。すると、こちらに向かっている少年と目が合い、小さく声を漏らす。

その少年は声の変わりに笑顔を返し、小走りで真帆の下へ駆け寄る。

「ふう、ごめん。待たせちゃった？」

「ううん、私がちよっと早く着ちゃっただけだから」

「そっか。……………あ、さっき何か首を押さえてなかった？」

その質問に、う、と言葉を詰まらせ、先程の様に頬を紅潮させていく。

それを見て何を思ったのか、小さく笑い軽く背中を叩く。

「ま、いつか。じゃあ、行こう」

「うん」

幸せそうな笑みで少年の腕に腕を絡ませる。

対する少年は特に反応する事なく、優しい笑顔のまま右腕を預けている。

夢の終わり

人々が行き交う駅前の道を歩いていたが、ふと思いついた様に少年を見上げる。

「あのね、北斗」

エピローグ：夢の終わり（後書き）

ここまで読んで頂き、ありがとうございました。

この場に相応しいか分かりませんが、この話について少し余談を……。

まず、この『夢の終わり』を書くきっかけは『バッドエンドを書きたい』という思いつきからでした。

しかし、ミニエナイチカラ最終話を書いた時点で執筆を止めてみると、個人的に後味がよくなくて……。

悩んだ末、付け足す形でエピローグを書きましたが、結果どうなっただか……。

結局個人的な判断で終わらせてしまいましたので、感想、アドバイス等がありましたら、是非とも聞かせてください。

長くなりましたが、完結出来たのも読者の方々のおかげだと思っています。

重複しますが、本当にありがとうございました。

どうぞ、これからもよろしく願います。

広告募集中

小説関連広告に最適です。
出版社や印刷会社はもちろん、
個人の広告でもOK

縦：140mm 横：110mm

詳しくはPDF小説ネット広告募集をご覧ください。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネットは2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3748a/>

夢の終わり

2008年11月7日07時53分発行